

神戸ミュージアムロード “Re:Link” 計画

—アートと生命をつなぐ、参加型リビング・ストリート—

1. 背景と課題認識

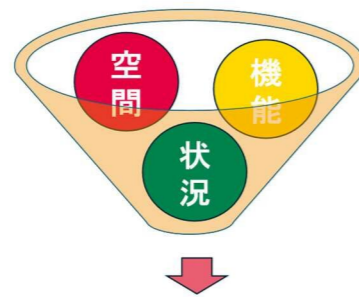
神戸・ミュージアムロードは、兵庫県立美術館から王子動物園へと続く約 1.2km の文化軸である。しかし現状では、単なる通路としての機能に留まり、来街者の滞留や地域住民の関与といった「賑わい」が十分に生まれていない。また、震災経験を持つ神戸という都市文脈において、平時の景観と有事の防災・レジリエンス(回復力)の両立が空間デザインに十分反映されていない点も課題である。

本提案は、このロードを「アート・防災・交流の要素が共存する“生きた道”」として再生し、地域とともに継続的に進化する「リビング・ストリート」へと変革することを目的とする。



2. 基本コンセプト:「変身」と「つながり」

本計画は、美術館(Artificial/静)から動物園(Life/動)への道のりを、単なる移動空間ではなく、「都市が生命体のように呼吸し、変身するプロセス」として再構築する。ここでいう「変身」とは、大規模な土木工事によって道路形状を変えることではない。既存環境の中に、色彩やアート、可動式の拠点を“そっと加えていく”ことで生まれる、柔らかな変化のプロセスを指す。このプロセスは、市民・学生・アーティストが関わりながら、過度な負担なく参加できる「軽やかなアートの試み」として位置づけられる。

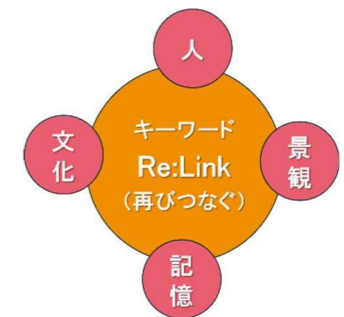


都市が生命体のように呼吸し、変身するプロセス

- 1) **空間の変身(Space Metamorphosis):人工から自然へのグラデーション** ミュージアムロード全体を一つのキャンパスと見立て、南側の「洗練された幾何学アート」から、北側の動物園に近づくにつれて「有機的で柔らかな自然・生命」へと、色彩とデザインが徐々に「変身(グラデーション)」する計画を行う。この視覚的な変化により、異質な要素であったアートと動物園を、一つの連続した物語としてつなぐ(Re:Link)。
- 2) **機能の変身(Functional Metabolism):鼓動が光になる循環** ここでは「生命」を、人々の活動エネルギーそのものと定義する。歩行者の踏圧を電力へ「変身」させる圧力発電の導入により、「人の動き(生命)が、夜間のライトアップ(アート)の電源となる」エネルギー循環を生み出す。来街者は歩くことでアートの一部となり、都市とダイレクトにつながる体験を得る。
- 3) **状況の変身(Resilience):広場から防災拠点へ** 平常時は移動販売車やサーカスが集う「祝祭の広場」が、災害時には即座に給電・物資拠点へと「変身」する。この可変性こそが、変化する状況下で市民の生命(Life)を守り抜く、強靱なりビング・ストリートの姿である。

キーワードは Re:Link(再びつなぐ)。

ミュージアムロードに全く新しい異物を持ち込むのではなく、もともとこの場所に存在している「人・文化・景観・記憶」を、ゆるやかに結び直すことを目指す。



3. デザインと空間の統一システム

「美かえる」の色彩を活用し、機能性と創造性を両立させた低負荷な空間演出を行う。

A. 美かえるパレット(貼付アート)

兵庫県立美術館のシンボル「美かえる」から抽出した5色を使い、10~20cm程度の小型シール(パレット)として展開する。手すり、配電箱、ガードレールなど既存公共物の表面に展開することで、生活動線を妨げずに色彩のアクセントを創出する。



デザイン・クリエイティブセンター神戸
(<https://kiito.jp/project/mikaueru/>)より転載

B. グラデーションによる物語化

美術館側は「幾何学的でカラフル」、動物園側は「丸みのある柔らかい色面」といったように、区間ごとの雰囲気合わせた静かな色彩変化を持たせ、ロード全体に物語性を付



与する。これらは着脱可能であり、イベントや季節に合わせた柔軟な更新が可能である。

4. 機能強化：創造性、防災、スマートエネルギー

本計画の核となるのは、恒久的な建築物に依存しない「フレキシブルな文化・防災ストリート」への進化である。

A. 創造性と賑わいの創出（移動式文化・交流拠点）

神戸市等が保有する移動販売車やコンテナを「動くキャンバス」として活用し、動的なミュージアム・ゲートウェイを形成する。

これらの活動は、通行を妨げないよう「兵庫県立美術館前の広場」「駅前広場」「沿道に点在する公園」といったオープンスペースを拠点として展開し、以下のような「生命力の祝祭」とも呼べる光景の創出を目指す。

多様な活動の集積：キッチンカーだけでなく、移動図書館、ミニサーカス、移動動物園などが参加し、混沌としつつも愛に満ちた空間をつくる。



社会課題へのアプローチ：楽しさや賑わいの中に、保護犬・保護猫の譲渡会や震災募金、学生による社会課題発表の場（写真展等）を組み込む。

五感への刺激：スパイシーな香りやパンケーキの匂い、動物の鳴き声、音楽、そしてアートが混然一体となり、誰かの痛みに寄り添いながらより良い未来を願う「生きた心」が通い合う場とする。

B. 防災・レジリエンス機能

これらの賑わい施設は、全て「可動可能な要素（モジュール）」で構成する。

迅速な空間確保：平常時は自由なレイアウトで賑わいを作るが、有事の際は迅速に撤収し、避難経路や緊急車両通行路を確保する。

災害支援転用：移動販売車は、災害時に緊急物資供給、炊き出し拠点、情報提供・充電ステーションへと役割を変えることで、防災都市・神戸のレジリエンスに貢献する。

C. スマートエネルギーとモニタリング（技術的アプローチ）

ミュージアムロードの持続可能性を高めるため、歩行者の踏圧を電力へと変換する圧力発電装置（例：Pavegen）を導入する。

エネルギーの可視化：歩行により生じる運動エネルギーを電力として回収し、夜間の小規模な灯光サインやアートイルミネーションの補助電源として活用する。「人の動きがまちのエネルギーになる」仕組みを可視化し、SDGs（目標 7・11）への理解を深める環境教育の役割も果たす。

データ活用(EBP)：本装置は「都市の振る舞いを読み取るセンサー」としても機能する。同時に

取得される人流データを解析し、「貼付アートの回遊効果」「移動販売車の最適配置」「イベント施策の効果測定」等の定量的な評価（エビデンス・ベースト・プランニング）に活用する。これらのデータは大学・研究機関と連携して解析し、神戸市の政策へフィードバックを行う。



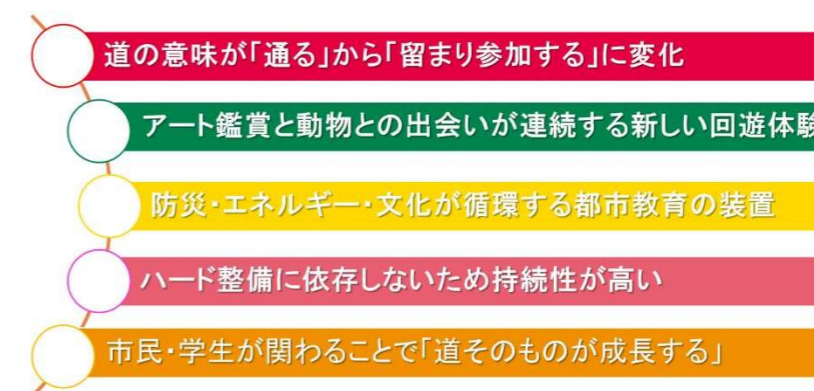
5. 持続可能な運営とフェーズ計画

行政（神戸市）、大学（徳島大学・関西学院大学等）、地域住民・企業が連携する持続可能な運営体制を構築する。2026年度から5年間の試行期間を経て、2031年度からは神戸市や近隣大学や地域との連携を図り、10年目となる2036年度には、住民主体による持続可能な運営モデルへと移行する。

フェーズ	実施内容	主体
Phase 1 （試行期） 2026年～	・主要交差点等への「美かえるパレット」試験設置 ・移動販売車を用いたミニギャラリーの試験運用 ・可搬型発電ユニットのデモ導入とアンケート調査	大学 神戸市
Phase 2 （連携期） 2031年～	・貼付アートの範囲拡大 ・「Re:Link Festival (仮)」の開催（移動動物園やサーカス等の誘致） ・圧力発電データの収集開始と夜間ライトアップの実施	市・大学 地域
Phase 3 （発展期） 2036年～	・移動販売車の災害時転用モデルの確立（充電ステーション等） ・圧力発電データに基づく運用最適化 ・住民主体による持続可能な運営モデルへの移行	大学 企業連携

6. 期待効果

本提案は、神戸ミュージアムロードを「変身する道」として再定義するものである。「美かえる」の色彩による軽やかな景観形成、移動型拠点による動的な賑わい、そして圧力発電によるスマートなエネルギー循環。これらを「Re:Link」させることで、文化と防災、そしてアートと生命（いのち）がつながる、未来志向の参加型ミュージアムロードを実現する。



空間の変身 (Space Metamorphosis)

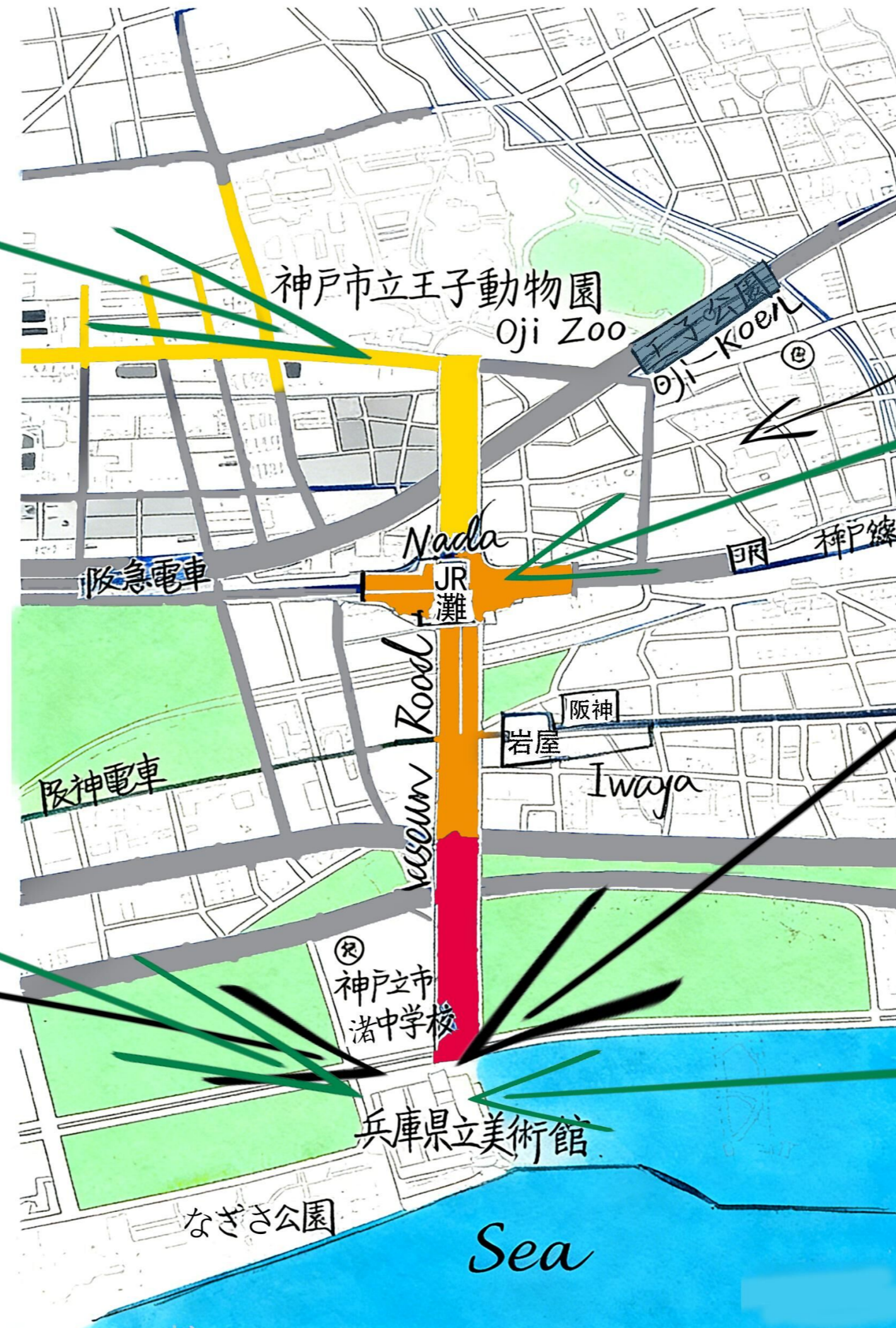


ミュージアムロード全体を一つのキャンバスとし、南の幾何学アートから北の自然・生命へ、色とデザインがグラデーションしながら空間の変身を演出する計画。視覚演出によってアートと動物園をRe:Link (ストーリー性) でつなぐ。

機能の変身 (Functional Metabolism)



「生命」を人々の活動エネルギーと捉え、歩行の踏圧を圧力発電で電力へ変身させる仕組み。人の動きが夜のライトアップ (アート) を支えるエネルギー循環を生み、来街者は歩くことで都市とつながる体験を得る。



神戸ミュージアムロード “Re:Link” 計画
—アートと生命をつなぐ、参加型リビング・ストリート—

状況の変身 (Resilience)



平常時は祝祭の広場としてにぎわい、災害時には給電・物資拠点へ即座に変身する可変性を備えた空間。変化する状況の中で市民の生命 (Life) を守る、強靱なリビング・ストリート。

